

書 評

十市 勉 著

石 油 産 業

——シリーズ世界の企業——

評者 野 村 正 勝 *

Masakatsu Nomura

シリーズ世界の企業の一冊として日本経済新聞社から最近出版された本書は産業編と企業編からなる304ページの大著である。

不透明さを増す国際石油市場が今後どのように展開してゆくのか、技術者のみならず国際化時代を生きる現代人にとってすぐにでも正確な情報をえたいテーマであるが本書はそのものずばりの題で第一章から読者をぐいぐい引きつける、国際的な動きから国内の小さな動きまで適切に書き込まれているので非常に理解しやすい内容となっている。

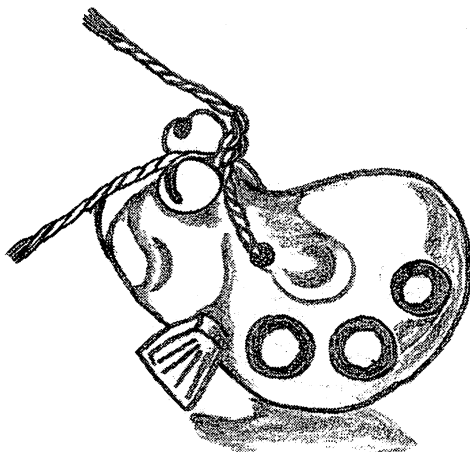
産油国国营石油公社がメジャーのように垂直統合化された組織を目指しており、従って産油国が自ら市場と直接対峙することになるので市場重視の行動をとることになり石油価格の変化も穏やかになり消費者の利益にもつながるとの著者の視点は極めて説得力があるがこれに対し全く相反する立場のあることもつけ加えて石油市場の予測の困難さを読者に印象づけている。結局1960年代までは「メジャーの時代」70年代は「OPECの時代」そして80年代は「自由市場の時代」とすれば90年代は「産油国とメジャーの共存共立の時代」と予測する拠に著者の論旨を読みとることができ、それが容易にとどめることのできない大きな時代の流れであるように思えるのである。

石油開発に関しては米英欧における開発費の増大のため今後他の非OPEC地域での開発が進むと述べているが原油がさらに高騰すれば前者の地域での開発も進むと思われ石油資源は思いの外弾力性のある資源である事に気づく。この意味で評者のような石炭科学の徒は現在の石油価格に対処できるような合成燃料開発だけでなく全く新しい視点に立った石炭等の転換技術開発が行われなければならないように思うのである。

また米国で行われている石油産業の大型買収合併現象も実面的に確に解き明かしていてよく理解できる。評者は当然我国の石油業界のゆくえ、特に資源開発への参入の大切さを思うのであるがそういった動きも小規模ながら実際にみうけられるのを知ってほっとすると同時に確かな方向のように思うのである。

全体の2/3を占める企業編は世界の主要石油企業19社の財務体質や経営戦略を詳述しており石油業界の事情に詳しい方々にとっては、これまでの知識を整理する意味でまことに適確なデータが提示されているようで非常に有意義な書ではないかと思う。評者のような業界の事情に余り詳しいとは言えない読者や時間のない人には産業編だけ読まれても石油産業の世界的規模での将来展望がえられ、得るところが極めて大きいと思われる。とに角大変興味深い読物となっており是非一読をすすめたい好著である。

(日本経済新聞社発行、305ページ、定価2,800円)



M. Nomura

* 大阪大学工学部応用化学教室教授

〒565 吹田市山田丘2番1号